



特定非営利活動法人

アーシヤ

アジアの農民と歩む会

会報  
66号

小規模生産者グループのセミナーの後で、スタッフと農村普及ボランティア。於・マキノスクール農場。



## 今年は暑さが一段と 身にしみる夏でした

理事・榎本 進

この夏、私たちの家は、今までにないほどお客さんが絶えません。ゲストの予定表まで登場する不思議な夏です。リモートの講義に行き詰まりを感じる学生や、実習先がなかなか見つからない学生。子ども達の夏休みの過ごし方に四苦八苦する親子。楽しく海外旅行の計画を話し合う時代はいつ来るのでしょうか。コロナに有効な対策なんてあるのでしょうか。毎晩、話が盛り上がります。私たちの田舎でも異常気象による土砂災害や作物への影響があり、豚熱も再び各地で始めています。コロナが一段落したら又いつも通りの生活に戻れると思込んでいること自体がもうすでに妄想なのかもしれません。それぞれの場所で今できることを考え始める、新しい一歩を踏み出せるチャンスの時としたいものです。アーシヤのこれまでの地道な取り組みが広く共感していただける年、アジアの底知れない魅力が見直される時代になってほしいものです。

次の時代を担う若者に課せられた課題は、巨大資本が牛耳る、迷走する経済からどうやって抜け出し、人間と

しての暮らしを取り戻すかだと思います。そのためにはそれぞれの分野での新しい発想と行動が必要です。それには自然の恵みを身体で感じ、その中に浸る心地よさを小さな時に体験することが、とても大切な気がします。

私は今、若者と慌ただしい夏を過ごしていますが、今日はこんなもの拾ったよ、こんなもの作ったよと素朴な幸せと喜びを、今日夕食を囲む友とかみしめたいのです。そして、せめて今この時も、途方に暮れ必死に生き抜いている人がいることを覚え、思いをはせたいと思います。これからも自然エネルギーや様々な開発、工夫で便利さが追求されていくように思いますが、コロナが教えてくれる私たちが生き延びる方向は少し違うのかもしれない。もっと森の中にどっぷりつかった、野性的な暮らしが、みんなで分け合って平和に暮らせる優しく、美しく、可愛く、おしゃれな新しいファッションだと、若い柔らかな感性で捉え直すことが一番の近道なのかなとすら思います。

早さより、力より、大きさより、能力よりずっと素敵なものは何ですか。

- ・薪を高く積むこと
- ・昆虫を探ること
- ・木に登ること
- ・子ども達の瞳がキラキラと朝露のように輝くとき
- ・夕食の魚を釣ること
- ・布を染めること
- ・長い棒を持って歩くこと



## 自立、多様性の共存に向かって

～農村リーダーが農村を変える～

事業統括責任者・三浦 照男

### 「いつまで支援したら自立できるんだ！」

悲鳴にも似た問いかけが耳に響きます。

長年インドプロジェクトを支援してくださっている方にとっては当然の疑問でしょう。「本当に我々の寄付金や会費は現地の人々の自立のために使われているのか」「日本人など派遣せずに現地の人たちだけでやれるんじゃないか」「支援すればするほど、現地の人々の依存性は高まるのではないか」等、数知れない疑問符が、その次に浴びせられているようです。実際このような問いは現地で活動している私たち自身の問いでもあるのです。

**自立とは？**一般的には「他に依存しないで物事を成し遂げられること、または隷属的にならず、支配されず自発的にものごとを成し遂げられること」という意味合いで使われます。正に、「自立」という言葉は、アーシャのインドプロジェクトの重要目標として挙げられています。

「言うが易し、行方が難き」。プロジェクトを進めれば進める程、自立ではなく依存度が高まってくるようにも思えます。そして、私たち日本人のような外部者の役割は初動期間、中盤、そして終盤と変化しなければならないことに気づきます。また、自立のための時間と、自立のためにどの分野に力をいれるべきか、それらを明確にしていかなければ自立に向けての目標達成は難しく、想像していた以上に自立への道は遠くようす。乗り越えなければならない壁は高く厚いように感じます。

インド農村の貧困・小規模農民を主なターゲットとした事業において、経済的な壁、格差の壁、伝統的な価値観の壁、技術的な壁、組織運営能力の壁、更には伝統的価値観等の強固な壁を乗り越えながら自立に向かっていくしかありません。膨大なエネルギーと時間がかかることを覚悟して取り組む必要があるようす。

### 社会には自立したくない人も結構いるのです。

「自立なんかしたくない、自分で決めるのは嫌だ！誰かに決めてもらった方が安堵する」。リーダーとして責任を持つようになることで、ストレスを感じる人は多くいます。もしかしたら大半がそうなのだと思います。自ら決断することは自ら責任をとることと表裏一体だからで

す。また、リーダーはグループや組織のために資金調達、情報収集、信頼の獲得、困難を乗り越えるだけの運営能力、忍耐力、判断力を養わなければなりません。このような潜在能力のある農村住民に見つけ出すのは至難の業なのです。やはり、時間はかかっても可能性のあると思われる若者を忍耐強く育成するしかないのです。

**カーストの壁**はインドでは様々な分野で取り出されます。歴史的に上位カースト民に支配され隷属的に仕える民として位置づけられてきたシュードラ（農奴）やダリット（不可触民）という下層カーストの人々が今でも隔離された形で農村に住んでいます。そのカーストは4千年以上前から征服者によって社会システム化され、精神的にも社会的にも差別を受けてきたのです。

イギリスはインドを植民地として統治するために、このカーストシステムを強化し利用したと指摘する研究者が多くいます。カースト制度は統治する者にとっては都合のよいシステムだったのです。更に宗教的価値観がそのシステムを絶対化してきたというスーパーパワーを備わっているようす。現在このような被差別カーストは指定カーストと呼ばれ、政府は様々な補助制度や恩恵をかれらに提供しています。その一方で、それらが彼らの自立を妨げている要因であるとも指摘されています。数千年間も続いたこの社会システムはそう簡単に変わるものではないようす。

加えて言うならば、驚くことにこのカースト的な差別意識はヒन्दゥー教徒のみならず、インドのイスラム教徒やキリスト教徒にも浸透しているという事実です。名字氏と親や親類等の職業でその人のカーストがほぼ分かるのです。特に、伝統的価値観によって形成されたカースト制度による身分制度は現在に至って貧困、就学率、栄養、職業の選択の自由と深く関わっており、インド国内での格差を益々広める要因となっているのです。インド社会全体の重大な課題です。

**自立のために人材育成は不可欠です。**特に、インドの中でも隷属的地位に置かれていた農村の人たちが自立に向けた活動をするためには、草の根で活躍する人材の育成が絶対不可欠です。先に述べたようにアーシャでは下位カーストや貧農農村住民をターゲットとし、その住民の中から様々な活動のためのリーダーを育ててきました。今では男性は農場主任や組合普及員、女性は食品加工リーダーや女性生産グループのための普及員等、責任を担っています。様々な活動を通して学ぶことの大切





さ、楽しさを身に染みて感じている者も多く出てきています。その例を2つ挙げたいと思います。

### ケース1. サントシュ・クマールさん：

彼はマキノスクール農場の責任を担っています。

37歳。4人の子の父。2004年に私がインドに赴任した時からのスタッフです。マキノスクールが主催する夜間学校で、8年生まで学び、その後奨学金を得てカトリック系の職業訓練学校（ドンボスコ）で車両整備の研修を受けた後、18歳でマキノスクール農場スタッフとして働き始めました。彼はダリット（不可触民）のカーストに属し、父親はレンガ職人。両親の家には自活できるだけの農地はありませんでしたので、農業経験はほとんどありませんでした。

しかし、彼は新しいことを学ぶことは大好きでした。私の赴任後、有機農業に対する考え方、有機農法の土の作り方等を示し、実際に彼と一緒に野菜や稲作をやってみました。農薬や化学肥料を使わなくても、地元の平均以上の収量が採れた作物野菜を見て、「農薬や化学肥料はもう使わない」と、マキノスクール農場を全面的に有機農業に切り替えることに賛同してくれました。ぼかし肥料、光合成細菌、菌床キノコ栽培と組織培養によるキノコ種菌生産、田植え機の操作、合鴨同時稲作等々、様々な技術や考え方を身に着けて、マキノスクールに研修のために来る学生や農民の指導や講師ができるようになりました。これは農場を管理するだけだったダリットの若者にとっては大きな自信と誇りになったようです。

更に、講師等を

するようになってから、短期間で驚くほど英会話が上達しました。オーストラリアから赴任した宣教師が彼と農場で働いたこ



セミナーで話をする農場主任のサントシュさん(右)と農村普及ボランティア シータさん(左)

インドの大学院を

卒業した者でも、サントシュさんのように有機農業に対して情熱と技術の持った者を見つけることは難しいと想い、10年前から彼を持続可能な農業農村開発研修コース主任兼農場主任に昇格させました。現在は仕事をしながら通信制大学にも入って学び続けています。

### ケース2. コール族シート・アディワシさん：

もう一つの例は、インドのドラビダ系の原住民、アディ

ワシと呼ばれるコール族の女性、シートさんです。インドでは原住民、又は部族(Tribe)出身者は不可触民と同等か、それ以下とみなされているのです。身長は150cmに届かず痩せて小柄、子どもは5人。12年生（高校）まで学びましたが、英語や数学はほとんどできません。夫は日雇い労働者で農地もありませんので、食事も十分にとれていない状態でした。農村保健ボランティアとして少額な日当を得ることは、彼女と彼女の家族にとって貴重な収入源となりました。最初はこれが、彼女がマキノスクールと関わりを持つ大きなモチベーションになったことでしょう。恥ずかしがり屋の彼女が、13年前、初代の農村保健ボランティアとして研修を受け、保健や栄養に関する知識や技術を村の住民に伝える活動を始めたことにより、彼女は大きく変わりました。人前で堂々と話すことはもちろん、同僚への気遣い、先んじて仕事に取り組む姿勢は他の村の女性たちによい影響を与えているようです。今年5月に、チームの中で「誰が良いリーダーか？お互いに評価してください」と皆で無記名投票しました。結果、10名中8名が「シート」と書いたのです。選んだ理由を聞くと、彼女の誠実に働く姿勢がすばらしい、と異口同音でした。現在、彼女は女性ボランティアのリーダーとして、現在取り組んでいる豆腐製造技術研修を習得中です。

### 育成された農村リーダーが社会を変える

しかし、通常は、ダリットや下層カーストの人が上層カーストの人がいるグループのリーダーとなることは至難の業です。数千年続く伝統的価値観からすると、一般の農民は貧困の中にあってもダリットがそのカースト以外の人のリーダーとなることは受け入れ難いのです。先に話したサントシュさんやシートさんもこのことを理解しているからこそ、人一倍学び、働き、皆に認められようと努力しているのです。このような若いリーダーが農村の中で育つことこそが今の農村インドには必要といえます。一人のリーダーの力は大きな力となって、やがて、の農村改善が動き出す貴重な原動力となるのです。

「多様性の共存と平和」の実現が叫ばれる一方で、排他的な民族主義や宗教的な至上主義・原理主義がもぐら叩きのように台頭します。特定の宗教、民族、または上位カーストだけを崇高と決めつけ、他を差別、排除しようとしています。インドもヒन्दゥー至上主義が高まっています。他人事ではありません。アーシャは様々な活動を通し、以下に多様性の中での共存と自立が実現できるかを試行しながら活動していきたいと考えています。



## 10代に広まるフェアトレード ～SDGsと共に再考～

インド事務局長 川口 景子

日本に一時帰国するときには楽しみなことの一つに、買い物に行って、どんな新製品が出たかチェックすることがあります。数年前に、フェアトレード製品が普通のスーパーで見かけられるようになり、私が大学生だった20年ほど前に比べるとずいぶん身近になったなと感じたことがあります。以前は、一部のアジア雑貨店やカフェなどで扱われているのみで、一般的に浸透していませんでした。国内での有機農業や地産地消、提携による農家支援などから、日本ではフェアトレード的なやりとりが広がっていったのではないかと思います。

アーシャの取り組みも、インドでの農村開発をけん引する人づくりを中心に、フェアトレードをインドと日本両方で促進している、ということができます。そこで、栄養の専門家として長年関わってくださっている理事の奥村昌子さん（藤女子大学・人間生活学部食物栄養学科准教授）が、同大学主催の未来共想フォーラム2021「フェアトレードと私たちのこれから - 国内外の実践例と女性からのまなざし」にパネリストとして一緒に登壇しようと声をかけていただきました。他にも、上原賢司先生（藤女子大学文学部文化総合学科 准教授）や、有坂美紀さん（フェアトレードタウンさっぽろ戦略会議 事務局長）からの報告があり、フェアトレードについて多面的に議論されたフォーラムとなりました。

### フェアトレードとは？

「より公正な国際貿易の実現を目指す、対話・透明性・敬意の精神 に根ざした貿易パートナーシップ」のことをフェアトレードと言います。現在、中国ウイグル族の人たちの人権問題に注目が集まり、綿花農場や工場で安い労働力として働かされているということに対して、欧米を中心に反対運動が起きているのが分かりやすい例です。買い物のとき、価格の安さが購入時の選択に影響しますが、その背景に、搾取されたり、児童労働があったりする場合、購入した側も、知らず知らずのうちにそういったことに協力することになってしまいます。ですので、その製品がどのような過程を経て買い手まで届くのかを見えるようにすること、そういったことで社会で苦しんでいる人々を少しでも減らそうというのがフェアトレードということになります。

### フェアトレードの今

国連で採択された持続可能な開発目標（SDGs）は、貧困や環境問題などの世界共通の問題解決のために、各国が経済成長だけではない努力をするように政策を促す力になっています。日本でもSDGs理解を深めるための教育が学校カリキュラムに取り入れ、ここ数年で10代のフェアトレードへの認知度が、それ以外の世代の2倍になっていると報告があり、学校教育までもがここまで変わることがあるのだと感心しました。

### さっぽろフェアトレードタウンの取り組み

日本国内では2011年に熊本市がアジア初のフェアトレードタウンとなり、札幌市も2019年に認定されました。さっぽろ戦略会議では、消費者、NGO、行政、生産者、学校などつながり、フェアトレードを広める活動をしています。フェアトレード大学として名乗りを上げた大学もあり、学生が国内外のフェアトレードの原材料を用いてお菓子を開発し、福祉施設や企業が製造、販売をしている事例が紹介されました。若い人たちの経済や環境、異文化理解、創造の場もつながり、さらに、それが公平で持続的な経済循環に結びつくことで、わくわくするような可能性を感じます。

### アーシャの取り組みとその役割

アーシャで活動していることは、現在の経済体制からはじかれていたり、選択肢が与えられていない農村の人たちが、農産加工や縫製を通じて、知識やスキルを学び、環境に配慮し、農村女性や小規模零細農家の地位向上を目指すことが目標になっています。言い換えれば、フェアトレードの生産者とその家族、農村を支える活動です。アーシャがこれまで蓄積してきた経験は、日本のSDGs教育の現場でも活用していただけるのではと感じています。何か一緒にしてみたいという方はお声がけください。様々な方面からの参加とつながりの中で、フェアトレードが理解され、消費の選択肢が増えることで、社会がより平和になっていくことを願って。



農村女性と縫製方法について話し合いをする筆者(左端)





## グローバルセミナーに 参加して ～第二波を乗り越えて～

代表理事 三浦 孝子

アーシャ国内事務所のある栃木県では、毎年、恒例の行事として、7月から9月にかけて週末は栃木県国際交流協会主催のグローバルセミナーが実施されます。

コロナ感染拡大の時期と重なり、キャンセルになるのでは、と心配しましたが、密を避け、感染防止策をしっかり施しての開催となりました。7月12日(土)当日は、お子様、高校生、社会人、スタッフ、ボランティアも含め、23名の参加でした。中には、夏にはグローバルセミナーを受講すると決めている方もいらっしや、昨年に続いて、アーシャセミナーに参加してくださいました。

今年は、実際にインドでのコロナ第二波を経験しながら、プロジェクトを統括してきた三浦副代表をメインスピーカーに、「コロナ第二波を乗り越え、北インドの人々と共に」～コロナ感染予防のカギはモリンガ加工とマスク縫製支援～と題して、現地報告会の形でお話ししました。7月初旬に帰印の予定が8月に延期となり、セミナーに間に合いました。

コロナ第二波では、アーシャインド事務所の所在地であるサムヒギンボトム農工科学大学の中でも感染が広が



下野新聞  
5月22日

帰国直後の三浦副代表が取材を受け、インドのコロナ感染状況を話しました。



り、クラスターが発生したり、亡くなる方もあった中、マキノスクールでは、一人も感染者を出すことなく、事業を継続できている要因は何か、カギは、モリンガ加工で培った食品汚染を予防するための手指衛生テクニックとマスクの製作と着用でした。インドでは、暑い国でもあり埃よけのためにスカーフなどで鼻と口を覆う習慣はあっても、マスクはつけていませんでした。貧しい農村女性と子どもたちを守るために、マスクを配布したり、村の女性たちにマスク縫製技術を伝達したことも、アーシャの活動としては、とても有効でした。

現地で活躍中の駐在員からの体験談には説得力がありますので、会場からのご質問もたくさんいただきました。さらに、チャイの作り方やモリンガ茶の試飲など行っていたら、時間が足りなくなってしまうほどでした。

お土産に梅雨の間に発芽させて育てたモリンガの苗をお持ち帰りいただいたり、モリンガパウダーやフェアトレード商品をお買い上げいただいたり、2時間のセミナーがあっという間に終わりました。

国際交流協会の高校生ボランティアのジャベリアさん、理事の大浦さん、国際交流協会やJICA栃木の皆様にもたくさんお手伝いをいただき、心より感謝申し上げます。



国際交流センター前で左より、朝比奈事務局長、ジャベリアさん、三浦副代表、筆者、大浦理事

# 2021年度通常総会の報告

事務局長 朝比奈 宏

2021年度通常総会は、6月5日(土)14時40分から那須塩原市の当会事務所にて開催されました。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、少人数の会場参加とWEB会議を利用した参加を組み合わせました。三浦孝子代表理事、三浦照男副代表理事、佐藤耕士副代表理事、大浦智子理事、正会員の村上和子さんが、新型コロナウイルス感染防止対策に努めて会場にて参加されました。また、及川洋征理事、奥村昌子理事、正会員4名、賛助会員4名はWEB会議を利用して参加されました。これに先立ち、同日13時から理事会が開催されました。

現地統括責任者の三浦照男副代表理事は、5月9日の臨時便で帰国後、14日間の隔離を経て、会場で参加しました。現地駐在の川口景子事務局長とインターンの松田翼さん、ボランティアの関口明希



さんはWEB会議を利用して参加しました。

佐藤耕士副代表理事が議長となり、開会を宣言して議事に入りました。まず、三浦照男副代表理事から2020年度(第17期)事業報告(案)が説明されました。3月20日に発出されたロックダウンは半年以上に及び、活動スケジュールの修正を余儀なくされた。民間助成金に加え、外務省日本NGO連携無償資金協力資金を得て、多岐に渡る活動が展開できた。大豆栽培・加工、モリンガ関連、縫製関連の事業を実施し、インドと日本で販売拡大と市場開拓を進めたことが説明されました。

次に、2021年度(第18期)事業計画(案)では、外務省の資金、民間助成金を活用し、大豆栽培の普及と豆腐製造・販売の本格化、モリンガ栽培の普及強化、縫製事業の継続、製品の販売促進を行う。SCSADは地元の農村女性のリーダー研修を行い、インターンシップ研修は3月に計画する。インドと日本のコロナ感染動向を見ながら段階的に活動を強化することが説明されました。

次に、7月に理事任期満了を控え、高丸和彦理事、中西泉理事、村上健理事が退任し、村上和子氏、開義民氏、青野勇氏を新任とする役員選任(案)が説明されました。各議案ごとに審議が行われ、全て承認されました。通常総会は、16時15分に閉会されました。

## アーシャ理事のご就任・ご退任のご案内

高丸和彦理事(2011年～)、中西泉理事(2015年～)、村上健理事(2017年～)には、公私共にご多忙なところ、在任中は本会運営にひとかたならぬご協力・ご支援を賜り、誠にありがとうございました。今後のご活躍をお祈りいたします。

また、ご就任いただく村上和子理事、開義民理事、青野勇理事には、本会運営へのご協力、ご支援を賜りたく、よろしくお祈りいたします。新任理事の皆様にご挨拶をいただきます。



## 理事をお受けして

理事・村上 和子

はじめまして。この度、理事を受けました村上です。

私が、三浦代表から理事のお話をうかがったのは、昨年の暮れ頃だったと思います。その時は「えっ! アーシャの理事を! 」と思いました。何をすれば良いのか? 何をどうお手伝いして行けば良いのか? 考えました。そんな中で、三浦代表から新型コロナ禍の中で、日本の中で近くでお手伝いしてくれるスタッフがいらないと言う話しをお聞きしました。近くで理事をしてくれる人がいて欲しいと伺い、娘に話したら「アーシャの理事、えっ?! おかあさんには、無理無理」と言われました。そうだよ! 英語、インターネットも出来ないものねと思っていましたが、再度お話しがあり、これも神様の導きなのかもと思い、お受けする事にしました。

今、世界中が新型コロナウィルスの中で、国々の交流がままならない中でも、インターネット、ZOOMとITの科学技術の発達を感じながらの生活ですが、まだ

まだ世界の中では、弱い存在である人々が迫害され始めています。しかし、そんな中でも、人々は食べなければ生きては行けない事、また、コロナ禍の中でも異常気象とも向き合いながら、農業に携わり日々を過ごす事の大切さを感じながら、生活を通してまわりの方々にアーシャの活動の事を伝えていければと思っています。

また、インドの女性が少しでも夢を持ち、希望を持って生活する事の大切さを次世代に託す生活が出来るように願って、遠く離れた那須の自然の中で願い、祈って行きたいと思っています。

私たちの日本でも、女性が夢を持ち、希望を持って生活出来るようになったのは、まだ百年位の事です。そんな中で、子育てをしながら家庭を守って、諦める事無く歩む事の大切さを伝えて来ています。そんな思いを、少しづつでも発展途上国の女性に向けて発信して行けるお手伝いが出来ればと願っています。

そして、那須の地で、フェアトレードの大切さを広げて行けたらと願い、三浦代表・スタッフの方々のお手伝いが出来ればと思っています。

そして、今、世界中がコロナ禍での大変な生活が一日でも早く収束する事を願わざる終えません。





## アーシャの<マサカ>の 新理事就任にあたり

理事・開 義民

今から5年前の2016年 4月14日と16日、2度に渡る熊本地震で、40年近く営業を続けてきたペンションと多くの人々に愛されたイタリアンレストランを全壊で無くし、余震が続く中、母親（当時92歳）、家内、長男、レストランスタッフの皆と避難所を転々とする<マサカ>の生活に激変しました。

良く人生の門出に使われる言葉に「人生には上り坂、下り坂がありますが、しかし<マサカ>という坂があります・・・」とあり、全く他人事として聞いていましたが、その<マサカ>が現実に私たちの身の上に起こった訳です。

話しを世界に目を向けると、あちこちで<マサカ>の気候変動が報告されています。カナダ北部では気温が50℃前後を記録したかと思えば、ヨーロッパ中央のドイツ及び周辺国では洪水で多くの被害が報告されています。また、中国でも未曾有の規模の水害で多くの人命が失われ、建物や数十万台といわれる車が流される映像を世界のニュースで観ました。

そしてまた<マサカ>のオンパレード。昨年から続く新型コロナウイルスの世界的なパンデミック、日本国内の

都道府県において緊急事態宣言が発令され、今年になって変異したデルタ株などのまん延。世界はどうなっていくのでしょうか？

そのような中、TOKYO 2020 オリンピック・パラリンピックが開催され、嬉しい<マサカ>の日本選手達の大活躍でメダルの数は過去最高を記録しました。

話しを震災後の我が家に戻しますと、店舗の再建が決まらないこの間に、念願のカンボジアに渡航する機会を得ました。そこでは子供達の孤児院を訪問し、若かりし頃に学んだクメール語でたどたどしく会話を交わしました。しかし、そこで見たのは子供達の給食の風景でした。育ち盛りの子供達にとって十分とは言えない栄養のバランスでした。今に思えば北インド原産のモリンガを子供達の給食で摂っていたら、栄養の改善が期待できるのでは無いだろうか？

現在の我が家では、新型コロナの影響もあって店舗の営業はまだ決まらないこの時期だからこそ、モリンガの美味しい摂り方をレストランスタッフの皆と一緒に試作中です。

昨今の<マサカ>の気候変動や新型コロナ禍など、世界の状況をポジティブに捉えて智慧を出し合い、プラスの<マサカ>に変えてアジアの国々へ。また、食の安全性と大切さを私達の足元から無農薬の野菜やスーパーフード・モリンガを通して、これからのレストラン作りを思案中です。



## 理事に就任して

理事・青野 勇

こんにちは。青野勇と申します。

私は、2017年度にマキノスクールのSCSADの学生として10か月過ごしました。高校卒業後すぐにインドへ行き、人生の転換のきっかけをいただきました。

実家は長野県の野辺山という標高約1300mの土地で有機で高原野菜を育てながら、酪農と一緒に複合経営をしています。自分の進路を悩んでいた時期に、地元の田舎ではなく、インドという大きな世界を感じることは私にとって本当に大きな経験になりました。

今回、理事をしてみないかとお声をかけていただき、インドやマキノスクールに微力ですが、少しでも、何かお返しができないかと思いお受けすることにしました。

現在は、三重県伊賀市にある愛農学園農業高校で農場助手として主に野菜部で働いています。愛農高校野菜部は年間約60種類ほどの野菜を生徒と一緒に栽培し、加工を含め、外部に販売しながら、自給を大切にしながら持続的な暮らしを求めて生活しています。

なぜか私の見ている世の中は、心のゆとりを持ちづらく、自分に自信を持ってない状態の人が多くいると感じます。私がインドで学んだことの一つである「僕は生まれ

ている」ということ。そのことを心の片隅において、私は、高校生と日々の小さな喜びを感じながら暮らしています。

私の現在の興味は環境問題です。野菜を一つ栽培するにも色々なことを考えていなければならないと思うのですが、地球温暖化に伴う急激な大雨や干ばつなど、野菜栽培で人間がどうすることもできない自然災害があります。新型コロナウイルスもその一つなのではないでしょうか。それらの問題の一番の原因は人間であり、私たちにあると思います。化学肥料や農薬などを使用することで自然環境が壊されて、大量に使用されているプラスチックは生態系を破壊しています。他にもたくさん問題を人間は引き起こしています。その問題解決に、人間は取り組んでいるのでしょうか。

シンプルに生きることが一番なのではないかと私は思います。自分が生産・制御できないものはなるべく使用しない。その土地のものを大切に、その土地で生きることを大事にしたいです。

将来は、実家の農場を引き継いで、自分の農場を持ちます。

私は、まだまだ未熟者で何が出来るかわからないのが現実ですが、与えられたこの理事という役割を活用してインド、マキノスクールの手助けになれるよう考えて行動していきます。

これから、よろしくお願いたします。

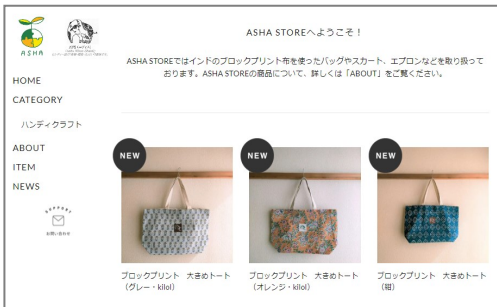
# アーシャ事務局便り



※ あなたの想いを世界へ、あなたの寄付でアーシャの活動を支えてください

## アーシャ通販サイト「ASHA STORE」のご紹介

会員、支援者の皆様にご愛用いただいているAVSのハンディクラフト製品ですが、コロナ禍でイベントや報告会などは中止となり出展販売の機会は少なく、委託販売先でも客足が少ないままとお聞きしています。このため、昨年からは厳しい状況が続いております。裁縫技術を一から習得し、製品を作れるまでに成長した北インドの農村女性たちが、心を込めて製作したハンディクラフト製品たちが眠っている姿を見ると切なくなります。「この製品を、もっとたくさんの人に見てもらいたい。」その思いから、通販サイトを立ち上げることにいたしました。通販サイトの選定から商品撮影、画像編集、商品説明、ページのレイアウト設定などを行い、2021年4月、アーシャ通販サイト「ASHA STORE」を立ち上げることができました。開店してから現在まで、商品の良さを伝えること、多くの皆様に見ていただくことの難しさを痛感しながら運営しております。取扱商品はまだ少ないですが、多くの皆様にお越しいただき、ご感想やご意見をお寄せいただけましたら嬉しいです。「ASHA STORE」にてお待ちしております。



<https://ashaasia.stores.jp/>



## 写真展・展示販売

6月26日～7月16日、ヒカリノカフェ 蜂巢小珈琲店（栃木県大田原市）ギャラリー廊下にて写真展、展示販売を行いました。コロナ第2波は予想をはるかに超える感染爆発となり、最も厳しい立場に立たされた貧しい農村の人々。日本とは思考回路の異なる人々のコロナ対策や生活不潔感覚の違い、それを乗り越えて、アーシャの活動の中で感染者はゼロ。このような現地の活動風景を切り取った写真の数々ご覧いただきました。お越しいただきありがとうございました。



## 事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。2021.5.1～2021.8.31 順不同、敬称略  
誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡下さい。よろしくお願いたします。

- 個人正会員 【北海道】横山明光【山形県】相馬一廣【栃木県】菊地創、村上和子  
【長野県】山中一耕【三重県】中西泉【熊本県】開義民
- 終身個人賛助会員 【千葉県】水内早紀【愛知県】町上恭平
- 個人賛助会員 【栃木県】漆原雅子、田仲順子【東京都】上遠恵子、山岡茂樹【長野県】山中薫
- 一般寄付 【栃木県】大浦智子、那須塩原教会、本田眞理、三浦孝子【群馬県】小曾根秀実  
【山梨県】森屋真一郎【大阪府】黒田あき【インド】松田翼
- 指定寄付 【東京都】日本基督教団全国教会婦人会連合

- 会費 個人正会員 5,000円 団体正会員 20,000円 終身個人正会員 50,000円 終身団体正会員 100,000円  
個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 10,000円 終身個人賛助会員 30,000円 終身団体賛助会員 50,000円
- 郵便振替 加入者名：アーシャ=アジアの農民と歩む会 口座番号：00160-0-315147

マキノスクールは、インド、ウツタル・プラデッシュ州ブラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 **アーシャ=アジアの農民と歩む会** ☆この会報は日本で製作・印刷しています☆  
 <事務局・交流センター> 〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17 TEL: 0287-47-7840 FAX: 0287-47-7841  
 事務局 朝比奈宏、丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org ホームページ: http://www.ashaasia.org